

レイドロー報告と協同組合憲章

会長 中 川 雄一郎

〔Ⅰ〕2010年は協同組合人にとって「レイドロー報告30年」の意味のある年であった。とりわけ、レイドロー報告を運動の重要な指針とみなしてきた日本の協同組合人にとっては世界の他の国々の協同組合人に増して有意義な年であったろう。

レイドロー報告とは1980年にモスクワで開催されたICA（国際協同組合同盟）第27回大会に提案され、満場一致で採択された「西暦2000年における協同組合」のことである。おそらく、それを「レイドロー報告」と親しげに、そして心を籠めてそう呼ぶのはほとんど日本の協同組合人だけかもしれない、と私は思っている。それでも、今は亡きアレグザンダー・フレイザー・レイドロー博士の祖国カナダで協同組合運動の研究を続けながら運動にも携わってきたヴィクトリア大学のイアン・マクファーソン教授もまた親しみを籠めて「レイドロー報告」とそう呼んでいる。そのマクファーソン教授はレイドロー報告の特徴を次のように指摘している。

- ① 「協同組合の本質」についてヨーロッパ中心の解釈を含めて北大西洋地域に共通する視点や考えを超越する、という問題に取り組んだ最初の重要な著書。
- ② 協同組合運動に積極的に参加する市民の能力が協同組合運動を活発にすることを強調。
- ③ 普遍的な利益を人びとにもたらすのは、地域コミュニティのエンパワメントであり、地域の人たちによる能動的で創造的な活動であることを明示。
- ④ その時代、その時期における主要な経済的、社会的および政治的な変化のなかに協同組合運動を位置づけた。すなわち、協同組合の外部に関わる

脈絡が協同組合の将来の発展にとって重要であるとした。例えば、急激なインフレに起因する困難な経済状況、政府や事業体における旧来型組織・機構への不信の増大、政治的信念の変容と政治的不安定、自然資源の危機の拡大、環境悪化、食料供給の逼迫、若者の失業および就労の問題、テクノロジー革新の影響、ますます強力になる大企業の力、それに発展途上国における急速な都市化などである。

- ⑤ 協同組合運動の創造的活力を再強化すること、新しい思想と行動の必要性を強調すること、協同組合の蓄積されてきた努力と新たな努力のコラボレーション（協働）の促進に関心を払った。
- ⑥ 協同組合人は以下のことに努力しなければならないこと示唆した。
 - (a) 協同組合事業体の本質を再考する。
 - (b) 協同組合原則を再検討する。
 - (c) 協同組合組織の規模拡大と多様性の推進を受け入れる。
 - (d) 協同組合における民主的管理の意識を育成し、高める。
 - (e) 協同組合が他の企業と明確に区別される「協同組合の社会的目的」に責任を負う。
 - (f) 協同組合と国家との関係の複雑さと不可避性を認識する。
 - (g) 協同組合と国家との関係は国によって異なる。
- ⑦ 第V章「将来の選択」はレイドロー報告の最も重要な部分である。すなわち、協同組合運動が満たすことのできる具体的なニーズは、
 - (a) 良質な食料の確保、
 - (b) より良い雇用の促進、
 - (c) 持続可能性への来るべき問題に取り組む、
 - (d) より良い地域コミュニティの建設、である。

協同組合運動はこれらのニーズに基づいて再構築されるのである。

マクファーソン教授がまとめてくれたこのような「レイドロー報告の特徴」から、われわれはレイドロー報告の目的をある程度まで理解できるであろう。一つは、西暦2000年までの20年間に協同組合が事業を継続していくための諸条件や環境を考察して協同組合運動に必要となる「転換」と「再構築」について示唆し、協同組合人に、彼・彼女らが協同組合運動を展望する「計画の立案」

と「青写真の作成」のための指針をグローバルな観点から提示することである。

そしてもう一つは、1966年にウィーンで開催されたICA第23回大会において決定された「ICA6原則」（「1966年原則」）の限界を明示することであった。レイドロー報告はこの時点で国際協同組合運動の到達点についてこう指摘している。

- ① 世界の協同組合運動は5億人以上の組合員を擁する「世界最大の社会-経済的な運動体」である。
- ② 協同組合の形態は多種多様であり、消費者協同組合（生協）はむしろ少数である。
- ③ 協同組合は、経済や文化の形態が違って、ほとんどすべての国に存在している。
- ④ 協同組合の概念は多面的でありかつ普遍的である。
- ⑤ 協同組合の企業規模も幅広い。
- ⑥ 第三世界（発展途上諸国）では協同組合が広範に拡大している。

レイドロー報告は、このような運動の到達点を指摘した後でICA6原則に言及し、「しかし、6原則にまとめられた現在の定式についても疑問は残っており、多くの協同組合人は原則についての声明が満足のいくものとなっていないと感じている」と論じて、「1966年原則」について次の二つの欠点を指摘した。(1) 原則それ自体を明確にするのではなく、現在の慣行を原則の水準に引き上げてしまった、(2) 主として消費者協同組合（生協）に準拠しており、農業協同組合、労働者協同組合、住宅協同組合など他の形態の協同組合に同じように適用することができない。要するに、協同組合原則は「運営原則でなく基本的な指針の表明として定式化され、すべての形態の協同組合に適用される最低必要条項として設定されなければならない」、とレイドロー報告は主張したのである。

レイドロー報告の意図したところは、1988年の第29回ストックホルム大会で採択された「マルコス報告」（「協同組合と基本的価値」）と1992年の第30回東京大会で採択された「ベーク報告」（「変化する世界における協同組合の価値」）に基本的受け継がれ、ICA原則については1995年にマンチェスターで開催されたICA100周年記念大会において採択された「協同組合のアイデンティティに関するICA声明」に反映されることとなった。

〔Ⅱ〕ところで、レイドロー報告から「一世代・30年」を経た現在、レイドロー報告を真に理解するためにはレイドローの「協同組合セクター論」を理解する必要がある、と私は最近考えるようになった。そこで、紙幅の関係もあるので、簡潔にレイドローの協同組合セクター論に言及しておく。

レイドローは、カナダのノヴァ・スコシアにある聖フランシスコ・ザビエル大学やカナダ協同組合連合会など比較的早い時期に彼自身が経験した運動に基づいて「協同組合のアイデンティティ」を追究している。詳しいことはマクファーソン教授の論文（「一世代を経て：「レイドロー報告」再考」協同組合経営研究所「にじ」2010年春号 No.629 所収）を参照していただくとして、私が最初にレイドローの協同組合セクター論を目にしたのは1974年にアメリカのミズーリ大学大学院協同組合リーダーシップ研究所での彼の講演ペーパー「協同組合セクター」であるので、ここではその講演ペーパーのほんの一部を抜き出すことで参照に付したい。

レイドローは、協同組合セクターが取り組むべき「四つの未解決問題」として、①「地球の諸資源を分け合う」方法、②「誰が何を所有すべきか」その方法、③「土地の果実（主に農産物）と工業製品を分け合う」方法、④「各人が必要とする部分を公正に確保できるシステムを整える」方法をあげ、これらの方法を確立することの重要性とそれに関わる協同組合運動の役割を示唆し、そしてそのために政府（第1・公的セクター）と多国籍企業のような私的資本主義企業（第2・私的セクター）の「二大権力」に対する拮抗力（countervailing force）として協同組合セクター（第3セクター）の経済的、社会的な機能を有効に働かせることの意味を論じた。この講演での彼の主張はレイドロー報告に散見される協同組合セクター論の視点となって現れている、と私は思っている。すなわち、政府・第1セクターと企業・第2セクターそれに協同組合・第3セクターの三者が相互に補完し合うことによって「人間の力でできる限り最良のものを達成する」という視点がそれである。言うまでもないが、この視点には、協同組合セクターが「第三の力」としてそれ相応の経済的、社会的な機能を発揮できるほどの成長を達成していることが含意されている。

レイドローのこのような協同組合セクター論には、簡単に言えば、あの「四つの優先分野」に、①「四つの未解決問題」への取り組み、②「イデオロギー

の危機」をコアとする「三つの危機」の認識と克服、③二大権力に対抗し得る「拮抗力」としての「第三の力」の育成、そして④協同組合セクターの成長、といった諸課題が埋め込まれている、と私は考えているのである。

〔Ⅲ〕さて、国連は世界の貧困削減・根絶（ミレニアム開発目標：MDGs）などに貢献してきた協同組合を評価して2012年を「国際協同組合年」とすることを決定した。世界の協同組合人にとっては大いに慶ばしいことである。とはいえ、協同組合陣営としては悦んでばかりいられないだろう。レイドロー報告が提示した諸課題は30年経った今も依然して課題のままである。そうしたなかで日本の協同組合陣営はこの「国際協同組合年」を単なるイベントに終わらせないために、ある企画を起こした。「協同組合憲章」の策定である。この「協同組合憲章」の提案者は本協会の富沢賢治会員であり、第1回検討会（準備会）で富沢会員から「協同組合憲章策定の提案」が提出されている。またこの協同組合憲章検討会の名簿には私を含め、富沢賢治会員、栗本昭会員、白石正彦会員、堀越芳昭会員、田中夏子会員、岩垂弘会員が名前を連ねている。本協会も国内外の協同組合運動に関心を払い、「ロバート・オウエンの遺産」を現代に生かしていくのに貢献するよう私は大いに期待している。